

「高齢者施設」の 賢い選び方

「サ高住」から
「特養」まで
プロに学ぶ

大賞に輝いたアクラスタウンと吉松社長



ここち西船橋と清宮ホーム長

我々の社会は、すでに「国民総介護時代」に入っている。

二〇一二年十月一日時点で、七十五歳以上人口（後期高齢者）は千五百十九万人いるが、団塊世代（一九四七年～一九四九年生まれ）が後期高齢者となる二〇二五年には約二千二百万人まで増加する。

老いた親や連れ合いを「どこで、どのように」介護するか。「終の棲家選び」は避けて通れない大きなテーマだ。正しく施設の「実力」を見極め、自分の希望

にあったケアを受けるにはどのような点に注目すべきだろうか。

施設選びの最大の問題を高齢者施設の専門家であるタムラプランニング＆オペレーティング代表取締役・田村明孝氏が次のように指摘する。

「この業界、『悪い施設』はまだたくさんあります。見分け方としては、そういう施設は掃除が行き届いていないのでエントランスに入った瞬間に異臭がしたり、職員の顔つきが暗くて挨拶がおろそかである事が多い。タオルなど消耗品も、不衛生な状態のまま放置されています。人手が足りず、職員が疲弊しきっている事が、そのまま入居者のケア低下に直結している様子が一目瞭然です。こうした施設がなぜ温存され、潰れないのか。それ

は、老人施設など安からぬからいい。」と判断する消費者が後を絶たないからです。悪い施設が改善されない最大の要因は、施設側とユーザーの『共同正犯』に他ならないと考えています」

こうした現状の中で「ユザーをより広く啓蒙していきたい」という狙いを込めた高齢者施設のイベントが開催された。

「高齢者住宅経営者連絡協議会（高経協）」が実施した「第一回リビング・オブ・ザ・イヤー2014」だ。プロ経営者が優良高齢者施設を選んだ、史上初の試みである。二〇一一年四月以降、今年三月までに開設した全国九千三十八の施設を対象とし、最終選考で上位七つの施設を選出した。そのなかから「大賞」を一ついざ家族や自分が高齢者施設に入ることを決断したとき、何を基準に「終の棲家」を選ぶだろうか。今年、初の試みとして業界団体に属する経営者たちが優良施設を投票で選んだ。そこで「ベスト7」に選出された施設を巡り、プロたちの「優良」の判断基準を取材した。

